

SHINCLUB 53

(株)辰 東京都渋谷区渋谷1-24-4 シブヤ百瀬ビル7F tel/03-3486-1570 fax/03-3486-1450 URL:<http://www.esna.co.jp>

今月の写真 /monthly photo



Antique Stove ノーザンライトハウジング 千駄ヶ谷ショールーム

今月のトーク/monthly talk

アンティーク・ストーブ

真夏ですが、ストーブの話です。

弊社で設計監修を担当した千駄ヶ谷の富士商事(株)本社ビル1階ギャラリーには、今おしゃれな「アンティークストーブ」が展示されています。ヨーロッパでは1830年代から薪ストーブが作られるようになり、伝統工芸としてその技術が伝えられてきました。しかし、時代の流れとともにそれらの薪ストーブは、合理的な暖房器具に取って代われ、多くは家々の倉庫や天井裏にしまい込まれていました。1970年代になって鋳物職人の息子たちが、かつて親の世代が作ったそれらの薪ストーブを生き返らせようと発掘・回収・復元を始め、ヨーロッパでは薪ストーブがブームとなり、現在では年間20000台の薪ストーブが販売されています。

なかでも先駆者的存在であるデンマークCASO(カソ)社のスタッフたちは、芸術性の高い作品や建築家、彫刻家とのコラボレーションモデルなどの名品をレストア(修復)し、ヨーロッパや日本に送り出しています。デザインや機能は国ごとの文化の違いがあり、さまざまですが、基本は外部と内部を「グラスブラスト」で磨きあげ、炉内の耐火煉瓦または耐火セメントを補修し部品の修繕あるいは交換を行って完成させます。デンマークではCASO社のほか、Toftegaards Antikovne(タフトガルト)社、またドイツではクッキングストーブの復元を得意とするOHA(オハ)社があります。

日本での広がり

CASO社など上記3社の日本総代理店である(有)ノーザンライトハウジング <http://www.northern-light.co.jp/>によると、日本でも薪ストーブの持つ

「身体にやさしい暖房機能」や「癒し効果」が見直され始めて、販売台数はここ5年間で毎年20%ずつ増え、去年は8000台になっています。特にログハウスを建てる人の8割は、薪ストーブを求めているそうですが、最近では一般住宅でも設計段階からリビングの中心に薪ストーブを置いて考える人も少なくありません。

私が「小さな子供がいる家庭では、ストーブの周りに囲いが必要ではないですか」と質問したところ、ノーザンライトハウジングの平田ディレクターは、「子供は動物的な反応で、熱いものには触らないし、火の周りで寝ることが大好きです。ヨーロッパの多くの家庭では囲いなんて作りません。」と教えてくれました。なるほど、家でマッチをすることもほとんどない今の日本の子供たち。ストーブに薪をくべながら、「火」とどう付き合うかを自然に覚えることは大事なことです。

さらにアンティークストーブは、アンティーク家具と同様、インテリアとしてのステイタスになっています。アンティーク家具の中には、実用に耐えないものもありますが、レストアされたアンティークストーブは、新しいものとまったく同じように使えます。

工事について

これまで日本の薪ストーブの市場は、ある意味で「自己責任」という名の下、施工のルール作りが遅れていました。「安全基準は気にするけれども、きちんとした設計基準に基づいていない工事もあります。炎が燃焼しても実は部屋が暖まらないーつまりストーブの機能を活かしきっていないんですね。」と平田さん。

ストーブの能力を100%引き出せるかどうかは、煙道設計に掛かっています。煙道内の煙の引き(ドラフト)を適切にするために、風圧帯を避ける高さを確保し、煙はできるだけ暖まった気体の状態でトップから逃がさないと途中で冷やされた煙がタール・クレオソートとなって、最悪の場合煙道火災を起こすことがあります。最低でもストーブを利用するシーズン前とシーズン後の煙突掃除は欠かせません。ストーブ使用の重要なもう一つのポイントは燃料。ヤニを多く含み、木質が柔らかいためすぐに燃え尽きる針葉樹(スギ、マツ、カラマツ)ではなく、広葉樹(ナラ・ブナ・クスノキ・サクラ)が適しています。半年から1年、室内の通気のいい場所で十分に乾燥させることが肝心です。

デンマーク、ノルウェーなど北欧は、バイキングの昔から鋳物作りの技術を持ち、アンデルセンストーブで知られるモルソー社を始め、長い歴史を持つストーブメーカーが厳しい環境基準を守りながら、現在も完成度の高いストーブを作っています。

それから平田さんが見せてくれたのがアメリカのThe Stephan Greene Press(ステファングレンプレス)社が出しているストーブマニュアル「A FOUR-SEASON GUIDE TO WOOD AND COALSTOVE HEATING」。春にやること、夏にやること、と4シーズンに分けて薪ストーブの利用方法やメンテナンスを挿絵入りでわかりやすく解説しています。

ノーザンライトハウジングでは、このように日本の法律の安全基準をクリアするだけでなく、ストーブの先進国である欧米の技術、器具も導入して的確な施工を行い、デザイン性の高いアンティークストーブの更なる広がりを目指しています。

余談ですが、このアンティークストーブの虜になるのは、圧倒的に「男性」だそうです。「家事や住まい作りは奥様任せ」とおっしゃる男性諸氏が、ストーブをきっかけに住まいに関心をお持ちいただくのもよいことです。家庭での「父親不在」などいっぺんに解消することでしょう。暑い日が続きますが、冬に備えてこんなお話をお届けしました。



①デンマークMorso1950年アーキテクトモデル60万9000円②ノルウェー1900年モデル。重層が特徴。67万円③フランスFaure model Lux 希少なグリーンエナメル57万6000円④白い内装には白い煙突も用意されている⑤デンマークLange1904年博物館に入ってもおかしくない逸品。ノーザンライトハウジング取り扱い商品中最高価格245万円。千駄ヶ谷ショールームにて展示中。⑥ドイツBartsクッキングストーブ90万3000円。ドイツは伝統的にクッキングストーブが多い。⑦デンマーク製のウッドブリケット。木製チップを接着剤を使わず圧縮して製造。使い方は薪と同じだが、薪よりハイカロリーで燃焼時間が長く、しかも手を汚すことなく取り扱いが楽。

作品紹介/monthly architecture 04

MM APARTMENT

建物はM氏親子2代、3家族+賃貸ワンルーム2戸+駐車場という構成になっています。40坪弱の敷地に3階建ての制約の中、5住戸+駐車場という条件はスペースオーバーの為、フリープラン、省スペース、採光の確保等が設計のテーマになりました。設計の特徴は以下の通りです。

□フリープラン:5戸の住戸が将来どのように変更可能なように、内部間仕切に構造壁を設けない構造計画を採用しています。従って、家族構成の変化に伴って住戸の改修が自由に行うことができます。

□省スペース:狭いスペースを有効に活用するため、極力廊下の少ないオープンプランを採用しました。内部間仕切も造り付け家具で対応する等、できるだけ省スペースに配慮しています。

□採光の確保:敷地は北側一面道路で、南側にマンションという採光に恵まれない条件のため、採光の確保が重要な設計条件になりました。唯一採光が入るのは北側のみなので、可能な限り北側の開口面積の確保に努めました。

□防水コンクリートの採用:屋上、バルコニー、外階段の防水、地下ピットの防水には、タケイ式防水コンクリートを使用しました。防水面に自由にアンカー等も打てるので、メンテナンス性もアスファルト防水より良いと判断して採用しました。(石原一学)

内装の仕上げやキッチンなど、ご家族それぞれがお好みが違うので、3件分の家を建てたような感じでした。打ち合わせも個別に行い、ご満足いただけるようにしました。

(伊東裕伸主任)



2階LDK



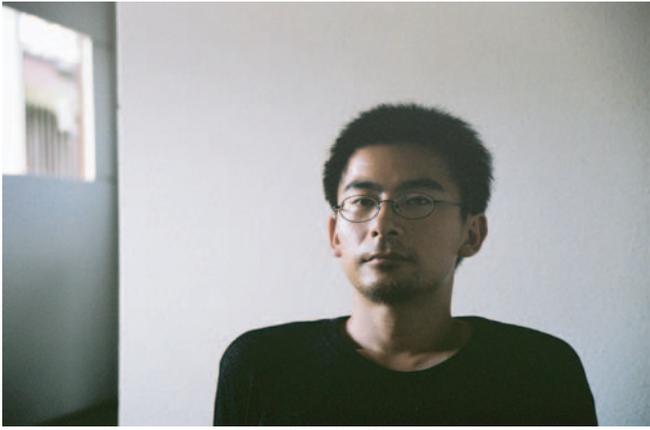
3階LDK



全景

所在地: 世田谷区
用途: 共同住宅
階数: 地上3階
構造: RC造
設計: 石原一学/K I 建築工房





日笠直彦(ひのなおひこ) profile

1971年 茨城県生まれ
 1994年 大阪大学工学部工学建築科卒業
 1994～2002年 アークスコーペ勤務
 2002年 日笠建築設計事務所設立
 2003年 「ギャラリー小柳ビューイングルーム」JCDデザイン賞2003優秀賞
 「ギャラリー・コンプレックス」リノベーション

今月は、日笠直彦氏に登場いただきます。日笠さんは、今、(株)辰で施工している都内のクリニックの設計を担当されていますが、この夏、水戸で開催される「カフェ・イン・水戸2004」のリノベーション・プロジェクトに、青木淳氏、アトリエワン(塚本由晴氏+貝島桃代氏)とともに参加しています。水戸芸術館と水戸市街を会場として開催される展覧会に併せ、街の中の古い建物を実際にリノベーションし、「街の再生のためにリノベーションが持つ可能性」が呈示されています。日笠さんの手がけた「セントラルビル」は築45年の木造2階建て、店舗と下宿、計14室のアパートでした。7月31日、8月1日に行われたオープンハウスのため水戸を訪れている日笠さんに話を聞きました。

—昨日のシンポジウム『リノベーションとはなに?』で話を伺いましたが、「セントラルビル」では、解体工事の廃材を再生したパーティクルボードを1階店舗部分の壁に採用しているということでしたね。今ある建物をモノとして見直してみる、モノとしてリサイクルしてみるを試みられたわけですが、一方で「リノベーション≠リサイクルだが、リノベーション≠リサイクルだ」ともおっしゃっていました。つまり社会問題としてのリノベーションと建築的なリノベーションとは違うということでしたが・・・。

日笠: 社会問題としての例えばリサイクルが、良い建築を導くとは限らないわけですね。そうなる可能性はあるけど、結局は別の問題です。ある建物の再利用は、かつてそれを主体的に使っていた人にとっては確かに懐かしいものの再生であり魅力であるけれども、そのこと自体は一般の人にとってほとんど無意味かもしれない。ノスタルジの肥大はいつのまにかキッチュになっていきます。第三者が共有できる「古さ」、「今」関わろうとしている僕らなりの捉え方が必要だと思います。古い建物に新しいものを加えることで、2つが組み合わせあって、よりよいものを生み出すことが理想でしょう。それは「合唱」のようなもので、古いものが歌い、新しいものが歌い、そしてその合唱がそのどちらとも違う独特の個性をつとめることです。

セントラルビルはかなり厳しい条件でやっていて、必ずしも完成度が高いとは言えませんが、その意味で独特のものにはなっていると思います。それはノスタルジに頼ったものではないし、かといって社会的に正しいからよい建築だというものではない。そういう尺度では捉えられない空間をリアライズしようとした。

—現実に、リノベーションによって「街おこし」ができると考えますか。

日笠: 可能性はもちろんあると思います。ただ一般に過剰な期待があるかもしれません。「ある建物をリノベーションで新しい建物にできるか」と言われれば出来る。しかし、その積み重ねによって新しい街づくりに繋がる可能性はあるかと問われれば、これは簡単ではないわけです。リノベーションを介して、「自分の生きている空間に主体的に関わる」あるいは「自分の欲しい空間はどういうものなのか考える」ことが必要だということとはとてもわかりやすい。しかしそこで見逃されるのは、例えばリノベーションを大なり小なりセルフビルドと混同してしまうことです。セルフビルドによる自分のスペース作りであれば、さっきのノスタルジの話と同じで、それ自体は他人と共有しにくい。あるいはコンバージョン(用途変更)はむ

しろ社会的な問題ですが、その実現自体は基本的にテクニカルな問題です。それは個別解をもたらすものではなく一般解に向かうもので、目の前の具体的な建築を形作るものではない。セントラルビルでリサイクルを徹底しているように、社会的問題を無視するわけではないのですが、リノベーションによって出来る空間には、そういう課題では掬い上げられないクオリティーがあると思います。

—今回、「街おこし」の解答を建築家に期待されていた人も少なくないのではないか、と思うのですが。

日笠: 戦後60年、近代社会がどういふものであったか皆知っているはずで。セルフビルドで自分の部屋を作り個人的な楽しみの世界に撤退しても、正しさにすがり社会的なものへ応答するだけでも、まともな環境は出来ない。その分裂がなにを生んだか忘れてはいけません。自分の部屋の壁の色を変えるのは誰でも出来ることですが、建物のどの壁、どの柱を抜くことが出来て、どの壁を壊してはいけないか、という判断は建築家が持っているような専門的判断力が介在しないと出来ないことです。そういう具体的なことを意識しないセルフビルドの高揚感はどうかだと思います。それを無理に踏み越えてしまえば当然危険ですし、無理とあきらめてしまうのもったいない。リノベーションで面白い空間を作ることは実際に可能ですからね。同様にリノベーションが街づくりにつながるというレトリックも、今までの苦勞を忘れているところがあるんじゃないか。それでは現実についてこない。元気を失うより積極的になるのは良いことだと思いますが、実際に何が出来るのか、そして何が出来るべきなのかをきちんと考えることは必要ですね。簡単ではないけれども、ポジティブな取り組みが必要だと思います。

—日笠さんは建築批評を積極的に発信することでも知られています。また独立前は神戸の設計事務所に勤務し、震災も経験しています。日笠さんの事務所が入っている六本木の「ギャラリー・コンプレックス」はリノベーションで生まれ変わった建物です。アート、それにつながるリノベーションを街の活力につなげたいという水戸市民の今後の活動にも注目していきたいと感じました。



写真上: セントラルビル正面。1階に「カフェイン水戸」のサインボード。写真左: 2階ギャラリーと日笠氏。剥き出しになった天井の既存の梁と、新しく貼られた白いパネル壁や柱が対比をみせる。

今月は、鉄筋工事の明豊工業を、弊社細山田工事部長とともに訪問しました。明豊工業は創業40年、高崎豊行社長は2代目、社長に就任して6年目です。取材ではまずこの7月の猛暑について話が始まりました。

高崎:昨日も一人屋上のパラペットの工事をしていて人間が、午後から具合が悪くなりましてね。疲労だったせいとか幸い2時間くらいで治りましたがこの暑さでどこも現場は大変ですよ。今年の1月から3月までは物件が少なく、受注単価も下がってしまい、廃業した協力業者が増えました。その結果、5月に入って受注は復活してきたものの、残った職人の仕事量が増え、人手が足りないまま夏に入っている状況です。7月からはこの猛暑なのに、単価が依然低いまま施工の応援もなく、職人の体力が落ちていきます。夏が終わる頃廃業するところが増えるのではないかと危惧しています。施工能力は気温が1度上がると、10人かかる仕事が15人になります。夏場手当てが必要ですね。

細山田:鉄筋工事は、材料をゼネコンから支給して、躯体の配筋のために、鉄筋を加工し組み立てる工事です。昔から職人の中でも職長と呼ばれる熟練工とその下の職人が、加工組立鉄筋のトン当たりの手間賃で契約する仕組みで成り立っています。明豊工業のような会社が「社員100人を従業員として抱えている」というものではありません。

高崎:元々、うちは建設会社の下請けとしてスタートしました。年頭に工事の割り当てがあり、自社工場加工していればいい、いわば「営業不要」の世界でした。しかしバブルが崩壊して1社の下請けだけではやっていけないと判断し、今は12社くらいのゼネコンさんとお付き合いしています。鉄筋も1社に限らず、メーカーごとに振り分けておきます。ヤードに在庫の鉄筋を長く置くく錆びるので、今は700~800t/月くらいがいいペースですね。

一弊社とは、2年くらいのお付き合いですが、現場での評判も非常に良いようです。

高崎:辰さんの工事は変わったものが多いですね(笑)。先日の新宿の現場は、巾止め等1フロア15000本ほどの鉄筋が入る工事で、図面を見ただけで大変だと思いました。12人の手を入れましたが、構造設計の先生が質疑に柔軟に対応してくださったので助かりました。日本の工事は、規格住宅の多いアメリカなどと違って、設計者の指示も入るので、ロボットで対応する加工技術だけでは無理です。まだまだ人の手が必要ですね。

一でも、こうやって暑い中作業をしなくてはならないと大変ですね。

高崎:もちろん熱中症対策には工夫をかせませません。「職長会議」は月に一度本社事務所に職長を集めて行うのが普通なのですが、当社では私を始め役員が現場に出向いて作業員全員を集め、工事管理について

写真左:事務所にて。
高崎豊行社長

写真右:千葉県白石市の工場。気温40度を超えるような日は、日中を避けて作業を行う。時には早朝までかかることも。

注意を促します。効率が悪くても結局このほうがいい。デジカメで撮った熱中症症例の写真を現場に貼って、対処例を具体的に指示しています。

それからまだまだ義理人情が左右する世界です。「この所長に頼まれたら、やらざるを得ない」という感覚はあります。あくまで人間が大事。同じ能力がある鉄筋屋が10社あれば、職人は好きなところに行きます。今どきはどれも集中購買で、値段だけが一人歩きしていますが、見えないところで業者に違いがあるということを発注者側にはもっとわかってほしいですね。

細山田:うちは躯体勝負ですから、どうしても値段が勝負になる。ほんとにジレンマです。

高崎:最初の見積段階で、材料のトン数もぎりぎり、加工・組立単価もぎりぎりに絞られると、作戦を練ることができないのです。例えば、100トンの現場を受けたら、90トンで効率よく切断して加工して、それでなんとか食いつかないでいかないとならない。材料を抜いているわけじゃないのですよ。それがなくなると経費倒れて結局食えなくなる。最近では、原設計が変わるので必ず鉄筋量は増える。床だとか、壁は細物が多く、ロス率が高いので、太物の鉄筋と同じロス率で見られるとつらいですよ。

一現場も、より作業効率をあげる工夫が必要ですね。

現場に作業スペースがあると、職人の手が空いているときに、梁とか柱を地組して揚げることができ、半分以下の人間でできます。また、下で仕分けする人、上で組む人と役割を分担すれば、地面で同じものを作るので精度も一定します。壁も同様のことを考えれば、コストをだいぶ落とせます。設計段階から、先生がこういうことを考えてくれると経費が節約できるし、やりやすい。自分は、街中を車で走っていても気になる施工現場があると立ち止まって観察します。新しい技術や見慣れないものが見えると、中に入って確かめずにはいられません。

一研究や情報収集に余念のない高崎社長でした。

TOPICS/INFORMATION

オープンハウスのご案内

大久保通りの集合住宅
Estudio(エストゥディオ)

日時:2004年8月28日(土) 10:00-18:00

このたび、中野区中央に集合住宅が完成しました。29~b38㎡のスタジオ10戸、57~61㎡まのメゾネット3戸、55㎡のペントハウス1戸の全14戸で構成されています。内部はオープンキッチンを中心としたスタジオを基本としています。ぜひご覧ください。

所在地:中野区中央5-24-9

構造:RC造 薄肉ラーメン構造 地上7階

用途:共同住宅

設計監理:佐藤尚巳建築研究所

構造設計:ローファットストラクチャー

設備設計:知久設備計画研究所



(仮称)TS集合住宅新築工事 地鎮祭
8月9日 港区

老朽化した工場を解体して、地上6階建ての集合住宅が建つことになりました。

構造:RC造 地上6階 地下1階
用途:共同住宅
設計:渡辺真理/設計組織A・D・H

編集後記

・藤沢市片瀬のノーザンライトハウジングを訪れた日は、とても暑い1日でしたが、お話を何うち、すっかりストーブに魅せられてしまいました。価格も思ったほど高くなく、煙突工事の設計も1週間ほどでできるそうです。既存のマンションにはむずかしいようですが、ログハウスだけでなくRC造の住宅にはとてもいいと感じました。